

聖書：ヨハネの黙示録 2：18～29

説教題：わたしのわざを守る者

日時：2020年12月27日（朝拝）

アジアにある7つの教会に対する主のメッセージの4番目、ティアティラにある教会へのメッセージを見て行きます。前回のペルガモンから南東へ約60キロメートルほど行ったところにある町で、今日はアクヒサルという名の町になっています。新改訳の第3版まではテアテラと訳されていました。テアテラと言って思い起こされる聖書の人物は誰でしょう。それは使徒の働き16章に出て来る紫布商人のルデヤという女性でしょう（新改訳2017ではリディア）。ピリピで最初に信仰を持った女性であり、ピリピ教会の重要な設立メンバーになった人です。あの彼女はこのティアティラ出身の人でした。その彼女の職業とも一致しますが、このティアティラは工業と商業で栄えた町だったようです。羊毛業、染物業、革細工業や陶器、銅細工製品等で有名な町だったようです。このような町の特徴が、このあと見るメッセージと深く関係すると思いますので、心に留めておいていただければと思います。

さてイエス様はこの教会に対して、19節で「わたしはあなたの行いを知っている」と言われます。主は燭台の間を歩く方、すなわち教会の間を歩き、一つ一つの教会を心に留めている主としてティアティラ教会のことも良く知っています。ここで特にあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている、と言われていました。「愛」「信仰」「奉仕」「忍耐」。これでもうすべてが備わっている教会と言えるほどではないでしょうか。一つ目に見たエペソ教会は愛がないと言われていましたが、ティアティラの教会にはそれがあると真っ先に言われています。また神への信仰もあるし、奉仕の歩みもある。そして黙示録で強調されている忍耐の歩みもある。さらに素晴らしいことは、これらの行いが初めの頃の行いより勝っていると言われていたことです。エペソ教会は初めの状態から落ちてしまったと言われていました。スタート時は良かったがバックスライドしてしまっていた。それに対してティアティラ教会は以前より成長しています。前進しています。進歩しています。

そのことを十分心に留めつつ、しかしこの教会にも問題があったことが20節以降に記されています。イエス様は言われます。20節：「けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この

女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。」 イゼベルとは旧約聖書の列王記に出て来るイスラエルの王アハブの妻だった人です。紀元前 850 年頃の人で、ご存知の通り、悪妻です。彼女はもともと外国人、シドン人でした。政治的理由からアハブは彼女を妻としますが、そのことがイスラエルに大きな災いをもたらします。彼女はイスラエルにバアル礼拝を持ち込み、主の預言者たちを殺しました。気が弱いアハブの上に立って、いかに豪腕を振るったかは様々なエピソードに記されています。あの彼女、あのイゼベルの生き返りでもあるかのようにして、このティアティラで自らを預言者として自称して活動する女の人があったようです。なぜイゼベルと言うのでしょうか。それは彼女が、この町で、また教会の中で人々を偶像礼拝と淫らな生活へ導いていたからです。

これはある意味で前回見たペルガモンの状況に似ています。2 章 14～15 節にバラムの教えとニコライ派の教えと出て来ましたが、その教えは 14 節にあったように、偶像に献げた肉をクリスチャンは食べても良いとし、またそれと関係する淫らなあり方を許容するものでした。今日の箇所 20 節で言われていることとほぼ同じです。しかしティアティラの特徴は、その活動を引っ張っていたリーダーは女性だったこと、しかも彼女の影響力は相当のものだったことです。前回のペルガモンでは偽りの教えに惑わされている人たちは少数でした。そしてそこではどちらかと言えば偽りの教えそのものに強調点が置かれていました。それに対してティアティラではかなりの人々がこの女預言者の言葉に従ったようです。主に忠実な者たちは、24 節で「残りの者たち」と言われています。そしてこちらでは教えだけでなく、多くの人々が彼女に従う生活へ実際に進んでいたことが示されています。

彼女の主張はどういうものだったのでしょうか。先にこのティアティラは商業や工業の町だと述べましたが、この町にはギルドと呼ばれる職業別の同業者の組合が多数あったようです。その組合に属さなければ、この町で生計を立てて行くことは困難でした。孤立してしまいます。そしてその同業者の組合は、それぞれ何らかの異教の神々と結び付いていました。それぞれの組合の守り神のような神がいました。ですからその会員になれば、その組合が主催する宗教的祭りや会合に出席しなければなりません。そこでは異教の神への礼拝行為と結び付いた飲み食い、宴会等も当然のように行われました。またそのような集まりはしばしば淫らなことと関係しま

した。このようなことがその地に住むクリスチャンたちにとっては大きなチャレンジだったわけです。そんな中、この彼女は、それらと一緒に参加しても問題ない！と主張したようです。そして結局は信者たちを偶像礼拝と淫らな生活へ導いていた。まさにイゼベルです！前回も述べましたように、ここで問題にされているのは、偶像にささげられた後、お下がりとなって市場に出回るようになった肉のことではありません。問題にされているのは偶像礼拝行為を意味する儀式的食事や行事に参加することです。これは市場に出回るようになった肉を各家庭で食べることは区別して考えるべきことをパウロも I コリント 10 章で述べています。異教の神の宮で飲み食いすることは悪霊と交わることであり、このティアティラのイゼベルがこのような主張したのは、そうでもしないとこの町で生きて行くのが難しいという考えが背後にあったからでしょう。同業者の組合、ギルドの習慣に同調しなければ村八分になってしまう。職を失うかもしれない。経済的に繁栄しているこの商工業の町で繁栄から取り残されてしまう。だから信仰を持っているクリスチャンでも、人々と一緒に偶像の宮へ行って、偶像に献げたものを食べても問題ないのだ！と彼女は主張した。それはキリスト教的に許されることである。信仰がしっかりしていれば大丈夫。心でしっかり信じていけば、形だけ合わせることは何でもない。信仰的に影響を受けないことができる！と。そして後に見ますが、こうする人の方がより高いレベルの信仰を持つクリスチャンであるとさえ語っていたようです。

このような彼女のメッセージは、この問題で悩むティアティラの信者たちの賛同を得やすいものでした。そこで彼女に従う人たちが多く現れたのです。そして教会もこの彼女やそれに従う人々に対して対処できず、そのままになっていました。これがティアティラの問題だと主は言われているわけです。

しかし主はそのままには放置されません。主はこの動きに対してさばきを行う主であることがここに語られます。最初の 18 節で主は「燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子が、こう言われる」とご自身のことを示されます。これまでも見て来ましたように、それぞれの教会へのメッセージの最初の言葉は 1 章の主のお姿から取られています。18 節の言葉は 1 章 14 節と 15 節に述べられていました。燃えるような炎の目とは、すべてを見通す目を持っておられるということであり、罪を見逃さず、それを焼き尽くそうとされる主の正しさを示しています。光り輝く真鍮のような足は、力強く、敵を踏み砕くさばき主であることを示

しています。ティアティラの教会員は、この主のお姿を良く仰がなければなりません。人間は悪の行いが良く見えないかもしれません。また見ても、マアマアと言って、そのままにするかもしれません。しかし主は罪を燃やし尽くす炎の目をもってすべてを見ておられ、ふさわしいさばきを実行される方です。その主がなさることとしてまず 21～22 節に、この女、イゼベルを病の床に投げ込むとあります。21 節によると、主はすでに彼女に悔い改めるチャンスを与えたようです。しかし彼女は悔い改めようとしません。そこで主は病に投げ込むと言われます。これはこの世において間もなくそういうさばきにあわせるということです。それに従う者たちもそうだと 22 節後半に言われています。22 節の真ん中に「この女の行いを離れて悔い改めないなら」とあるように、彼らには今少し猶予が与えられています。しかしそれを生かさないと大きな患難の中に投げ込むと言われています。さらに 23 節に「死病で殺す」ともあります。この「女の子どもたち」とは、イゼベルの実際の子どもではなく、彼女の教えと実践に従う人々のことです。おそらく 22 節で言われた彼女に従う人々と同じ人たちのことと思われます。大きな患難に投げ込むことの続きとして、あるいはその具体的な中身として、このことが言われている。これもこの世において悔い改めなければ間もなく行われることとして述べられています。23 節後半には「こうしてすべての教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知る。わたしは、あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる。」とあります。主のさばきは最後のさばきの日に完全になされる一方、この地上の生活においてもなされ始めるのです。それはそれに接する人々がすべてを見て知っておられる主に対してふさわしい恐れを持ち、正しい歩みへ進むためです。

さて一方のティアティラにいる残りの者たち、イゼベルの教えを受け入れない人々への励ましが 24 節以降に記されています。そこにこの動きに加わらない人々のことが「サタンの深み」を知らないあなたがた、と言われています。これはどういうことでしょうか。これはイゼベルに従う人々が自らをこのように呼んでいたことを暗示しているように思われます。彼らは偶像礼拝行為にある程度関わっても自分たちの信仰には問題ないと考えていました。言わばサタンの領域に踏み込んで、ある程度その世界を経験しても大丈夫。むしろ我々はこうしてサタンの深みを知っている。サタンの深みを知っても、なおこうして信仰に立っている。そういう意味でより高いレベルにある信仰者であると自らを誇るような仕方で、この表現を使っていたと考えられます。こういう世界のことを知らない、ただキリストへの信仰を

守っている人たちには分からない、より深い「サタンの深み」を我々は知っている。そういう悪の力がある程度知り、経験している方が、クリスチャンとしての深みを持てると。随分な主張だと思います。でも今日もこれと似たようなことを言う人がいるのではないのでしょうか。自分はいかに大変な罪と悪の中を通過して来たか、それを振り返って、そこから救ってくださった主のあわれみをほめたたえることのみに向かって触れるのならまだいいのですが、そういう中を通過して来た自分であることを誇るように語る人。まるで悪いことを色々経験する方が、悪の力を知り、サタンの深みも知り、よりレベルの高い上級のクリスチャンであるかのように語る人。しかしイエス様はそう言っていません。サタンの深みなど知らなくていい。そういうことがクリスチャンが成熟するために必要なのではない。24節最後に「わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない」とあります。サタンの深みを知るなどという学びは不要である。主が命じていることは25節にある通り、「ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。」ということです。主が与えてくださった福音をしっかり受け止め、そこで命じられている行いに進むこと。そのみを心を留めて前進すること。そのことだけでいいと主は仰っているのです。

最後の26～29節には勝利を得る者、すなわちこれまで見て来た主の言葉に従って、最後まで主のわざを守って歩む者に対する約束が二つ語られています。一つは諸国の民を支配する権威です。これは天の御国においてキリストとともに治める立場に就く者とされることです。27節はメシヤ詩篇と呼ばれる詩篇2篇9節からの引用です。ティアティラの主に従うクリスチャンたちは、その信仰のためにティアティラで困難な地位に置かれていたでしょうし、サタンの深みを知っていると誇る人たちから低く見られていたかもしれませんが、彼らこそやがてキリストによって高く引き上げられてキリストとともに治める立場に就かせていただく者たちなのです。そしてもう一つ28節に「わたしは明けの明星を与える」とあります。明けの明星とは明け方の空に輝く一番明るい星、一番星のことですが、ここでは何を指すでしょう。黙示録の22章16節ではイエス様ご自身が「わたしは、輝く明けの明星である」と仰っています。ですからこれはイエス様ご自身を与えてくださるということです。教会は燭台で、御使いは星と表現されて来ましたが、それらの光の源はキリストご自身です。そのキリストご自身が豊かなまことの光を彼らに与え、彼らを照らし、彼らを祝福してくださるということです。サタンの深みを知ると豪語する人た

ちは、自分たちこそ深い知識の光を持つレベルの高いクリスチャンだとしていました。しかしイエス様はサタンの深みを知らない、主のわざを守る者にこそ、輝く明けの明星を与えてくださいます。コリント人への手紙第二 4 章 6 節にあるように、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識の光で照らし出し、彼らを大いに光輝かせてくださる。ですから私たちは惑わされてはならないのです。

主は最初に語られたように、燃えるような炎の目ですべてを見ておられ、不道德な歩みを許容されない方です。サタンの深みを知っているなどという言い訳、正当化は通用しません。主はその者たちをさばかれます。ですから私たちはイゼベルに従うのではなく、むしろきっぱりこれに背を向け、すでに持っているものをしっかり保ち、主のわざを最後まで守る歩みへ導かれる者でありたいと思います。サタンの深みに飛び込んで新しい刺激、新しい世界を得ようとするのではなく、キリストの教えにしっかりとどまり、その道をひたすら進む者とされたいと思います。そのためこの世で卑しめられても、主はその人にこそ、やがて主とともに治める者となるという栄えある地位を与えてくださいます。また主はその人に明けの明星であるご自身を豊かに与えて、キリストにある神の栄光の素晴らしさを知る知識によってこの上なく光り輝く祝福に生かしてくださいます。